

# 韓国の文化と幼児教育の現状

## Early Childhood Care and Education in Korea

水 田 聖 一  
MIZUTA Seiichi

### 1. はじめに

大韓民国(以下韓国と略記)の社会を十分に理解するためには、韓国の「教育」についての考察を欠くことができない。韓国では教育が社会の中に独特な形で位置づけられており、また韓国社会の諸領域にさまざまな影響を及ぼしている。ひとびとの「教育熱」が極めて高いのもその一つの表れである。しかしそれに伴ってさまざまな弊害も出てきていることが指摘されている。世界的に最も低い水準にまで落ち込んでしまった出生率の問題も関係していると思われるが、特に、幼児期の「早期教育」が子どもたちにストレスやその他の問題を引き起こしてきている。近年、これらの早期教育に対する警告も出されている。先行研究を踏まえた上で、乳幼児期の教育に特に焦点を絞って、現状を論じる。また韓国の伝統文化と近年の経済発展とのギャップが子育てにどのような影響を与えているのかも考察する。

日本でも出生率が 1.3 を切ったことが話題になったが、韓国ではすでに出生率が 2001 年に 1.3、2005 年には 1.08 と下がり続けている。韓国経済の発展とともに女性が外で働くことの意義が主張されたことと関係しているが、こうした中で、保育および子育ての社会的支援が緊急の課題となっている。韓国自体は日本を調査研究対象としているが、日本も早急に対応しなければならない点では同じである。韓国における問題点や現状は、日本におけるふさわしい社会的子育て環境を作り上げる一助となるだろう。

### 2. 韓国を取り巻く文化状況

韓国社会は伝統的に、儒教的価値観の影響が強く、男女の差、「長幼の序」の原則が根強い国であった。後者は今でも根強く残っているが、前者は大きく変わりつつある。女性の立場は、古来家のことのみに限られており、忍耐と服従の精神をもって家事にのみ専念することが美德であるとされていた。19 世紀末の列強の侵入(進出)に伴い、宣教師らにより学校教育が紹介され、宣教師が設立した学校によって啓蒙と教育がおこなわれると、儒教的な女性観は急速に廃れていった。1948 年に大韓民国が樹立されたあとは、教育、就職、社会活動などの分野での権利が、憲法上は保障されている。2003 年に盧武鉉が大統領になって以降は、政府は「両性平等社会」を掲げており、家庭、職場、社会のいたるところで男女が平等に扱われることを目指している。2005 年には、女性差別の代表格でもあった「戸主制度」も廃止された。

韓国では日本と同じく、初等学校(小学校)と中学校が義務教育である。急速な経済発展に伴い、女性が高等教育を受ける機会も高まるという社会構造状の変化も起こっている。2006 年の報告では、大学に進学する男子生徒は 82.7%で、女子は 80.4%である。これは世界的に見ても高い数字である。

女性の社会進出が顕著になってきているにもかかわらず、女性の社会的立場や子育て環境は、快適とは言え

ないようである。元駐韓アメリカ商工会議所会長ジェフリー・ジョーンズ(Jeffrey D. Jones)は、『私は韓国が怖い』の中で次のようにいう。「韓国は男たちには住み心地のよいところかもしれないが、女性には息苦しく、融通の利かない国なのだろう。結婚した女性は夫と子どもの世話に明け暮れ、そのうえ夫の実家の行事まで手伝わされる。子どものいる女性が仕事を持つにはかなりの勇気と覚悟が必要なのだ」。(引用は文末参考文献からの引用。以下同じ。⑨-p.76.)

### 3. 韓国の幼児教育施設

日本では幼児教育施設として、幼稚園と保育所とがあり、前者が文部科学省所轄の学校であるのに対して、後者が厚生労働省所轄の福祉施設となっているが、韓国でも状況はよく似ている。

韓国では幼稚園は教育人的資源部が所管し、保育施設(어린이집:オリニジプ=「子どもの家」と呼ばれる)は、女性部の所管である。その保育施設もまた、「国公立保育施設」「民間保育施設」「職場保育施設」「家庭保育施設(놀이방:ノリバン=遊ぶ部屋)」に分けられる。さらに幼稚園、保育施設の他に民間経営の塾、学院(학원:ハグオン)がある。日本にも小・中・高レベルの塾があるが、韓国ではそれに加えて幼児向けの塾があるということが特徴的である。絵画や陶芸を教える「美術ハグオン」や英会話等のプログラムをもつ「英語ハグオン」などがある。大都市部での、幼稚園対保育施設対学院に通う5歳児の総数の割合は、およそ4対3対3であるという。(⑥-p.26.)

幼稚園の数をしてみると、1980年には901だったのが、2005年には8,275と大きく増加している。日本の場合は、13,723(平成19年度公表数)なので、人口が約5,000万人で日本の40%弱の人口であるのと比べると、現時点の比率で日本よりも多くなっている。

しかし幼稚園教育に関しては、以下のような問題点も指摘されている。

「幼児教育の専門家たちは幼児教育の重要性についての認識が社会全般に広まっていなかったり、幼児教育の本質まで認識されていないという見解を持っている。幼児の就園率を高めようとしての1980年代の量的増進優先政策の樹立及び試行は、幼児教育機関の質的水準を低める結果を招来して、幼児教育の本質についての認識不足現象を引き起こした。したがって1990年代は幼児対象の学院の乱立、学習産業の活性、早期教育、英才教育、特技教育が浮き彫りにされた時期である。その結果、父母たちは幼児になんであれ、誰よりも早く教えて競争社会で勝利するようにする熱望をもつようになって、幼児教育を基本生活習慣の形成または全人教育の基礎を磨く教育として理解するというよりは、早期ハングル教育などの知識注入教育として認識することになって、いわゆる『行儀の悪い子ども』を量産するようになった」と。(⑥-p.60.)

つぎに保育施設について見てみると、1990年には施設数が1,919だったのが、1995年には9,085、2000年には19,276、2005年には28,040とやはり急増している。しかしそれにもかかわらず、韓国でも「待機児童」問題は深刻で、共働き家庭、低所得者層、母子家庭・父子家庭などを優先するなどの措置がとられているという。

このような中で近年注目されているのは、韓国を代表する企業三星(サムスン)が1988年に同企業の利益を社会に還元する目的で設立した三星福祉財団の保育事業である。三星福祉財団には、高齢者福祉部門と保育部門の二つがあり、保育事業としては次の4つの事業を進めている。(⑥-pp.184-185.)

- (1) 保育施設をつくり、母親の働くことと子どもに質のよい保育を保障すること
- (2) 家庭福祉の増進、特に低所得者層の地域で親の生活相談や改善に寄与するとともに子どもに質の良い保育を保障すること
- (3) 高い保育の質を支える保育教師に国際学術大会を含む現任研修を行うこと
- (4) 大学に所属する研究者と共同研究し、保育プログラムや教材・教具の開発を推進すること

三星の保育施設は、2005年時点で都市部に43カ所で、そのうち7カ所は低所得者層の多い地域に設置されている。それ以外の地域の保育施設でも、低所得者層家庭の児童の入所を強化するなどの措置が執られているという。三星の保育施設の運営費は、三星福祉財団から50%と保育料から50%の割合で賄われている。施設の改築、増築、備品の修理などの費用は別途財団が負担している。

今後日本の保育所にも影響を与えると思われるが、低所得者層の多い地域の保育施設には、社会福祉士が配置され、主に4つの仕事をしている。(⑥-p.185.)

- (1) 親への支援。親自身が職業を獲得し、経済的に自立できるように支援する活動。また親自身が持つ神経の病気、虐待、離婚や再婚などの相談に乗ること。子どもが幸せになるために家庭への多様な支援をすること。
- (2) 子どもへの支援。言語能力、生活や情緒問題など個別の支援を必要とする場合に行う。
- (3) 地域社会との連携。地域住民から援助金を集め、その資金でいろいろな活動をする。例えば、医療を必要としている人に提携している大学病院を紹介すること、大学と連携し保育教師の教育を受けられるようにすること、保育施設が学生ボランティアを受け入れること等である。
- (4) 子どもの成長・発達に関わって、保育教師が福祉の専門に関わる支援をすること。例えば、地域の障害児施設と月に一度双方の子どもが交流を持つこと、保育教師が養護施設に出かけ、美術の指導をすること、等。

社会福祉士をオリニジップにおいて採用したのは、韓国最初の画期的なことであり、貧困児童に対する細心の観察と指導がこれにより可能になっている。

上述のような理由から、三星の保育施設への入園希望者は多く、韓国の保育の質の向上にも役立っていると、社会からも高い評価を受けている。

#### 4. 韓国の教育熱

韓国には「教育熱」「早期の教育熱風」という言葉がある。学齢期はもちろん、就学前の早期教育にも親たちは非常に熱心である。前項でも述べたが、学校の勉強以外にも多くの親は力を入れている。

学齢期では、韓国では近年幼年教育の風潮として「学習紙症候群」というものが生じているという。「学習紙」とは生徒が一定の量を勉強できるように定期的に家庭に配布される問題用紙のことであるが、「学習紙症候群」とは、「子どもの立場を顧みずに、無理やり『学習紙』による勉強を押しつけることで精神的に悪影響を及ぼし、小児精神科病院に通う子どもが増えているということ」である。(⑩-p.241.)

韓国からアメリカに移り六人の子どもを立派に育て上げたコウ・チョン・ヘソンは、韓国の教育熱について次のように語る。

「はっきりとした目標もなく、ただ子どもに何でも闇雲に押しつけている親がいます。自分の子どもがどんなことに才能があるのか、何が好きなのか、何に向いているのかもよく考えずに、ただ何でも人よりうまくできさえすればいいという漠然とした思いから、子どもを酷使しているのです。誰かがいいというものなら、手当たり次第に子どもたちにさせ、ほかの子に置いていかれてしまうという不安から、いつも急かされるように子どもを何かへと追い立てています。

韓国から世界的なゴルフ選手が誕生すると、自分の子どももプロゴルファーにさせようとクラブを握らせたり、映画俳優がよさそうだと見ると、すぐさま演劇学校に通わせたりする始末です。そういう親たちは、その有名人たちが成功に至るまでに経験した多くの悩みや努力、挫折や教訓などについては、少しも考えようとせず、ただ富と栄光という結果にばかり幻惑されているのではないですか。

口では子どもの幸せのためと言いますが、本当にそうならば、親はもう少し考えるべきです。子どもがそれを成し遂げるまでに、いったいどれだけの努力をしなければならないか、果たして楽しみながらできる努力なのか、失敗した場合に子ども

人生はどうなるのか……。『勉強しなさい』と子どもにひとこと言う前に、その陰で実に多くのことを考えなければならないのです。

韓国では、ほかの子どもとの競争が激しいので、大学に入るまでは熱心に勉強します。ところが大学に入った途端、多くの子どもたちは勉強せずにさまよい始めます。勉強する意味を見いだせないからです。結局、湧き上がる情熱は勉強以外のことに注がれ、彷徨を続けます。』(⑩-pp.42,43.)

それでも、韓国の親にとっては、他の子がやっていることを自分の子にさせないでいることができないのであろう。

平成 19 年の夏に、筆者は韓国ソウルにある国立民族博物館(국립민속박물관:クンニプミンソクパンムルグァン)を見学した。ここでは、いくつかの幼稚園の幼稚園児が見学に来ていた。下の写真にあるように、私服の幼稚園、ジャージのような制服の幼稚園、チマチョゴリ(치마 저고리)やパジチョゴリ(바지 저고리)の制服姿の幼稚園児などさまざまであった。(下の写真参照)





特に驚いたことは、日本ならばこのような博物館を見学するのは、小学校の高学年から中学校や高校生であるのに対して、ここでは幼稚園児なのである。韓国の教育熱、超早期教育の一端が感じられた。施設内で小学生にも出会ったが、彼らは数人でたむろして個々に携帯(電話)でゲームをして遊んでいた。幼稚園児はといえば、先生から受ける説明も右から左で(無理もないことだが・・・)、棒にのぼったり、立ち入り禁止のところに入ったりして叱られていた。幼稚園児には、幼稚園児にふさわしい遠足や見学の場所があると思うのだが・・・。

## 5. 早期教育に対する警鐘

このような教育熱、早期教育に対して、延世大学校医科大学小児精神科教授であり、新村セブランス病院小児精神科の医師でもある申宜真は、2000年の10月に『賢い親は子どもをゆっくり育てる』(日本語版は『かしこい親の子育て術』2004年発行)という本を出して、韓国の親たちに警鐘をならした。

韓国社会はまれに見る少子化社会になり、「少なく生んで、上手に育てる」という考えが広がっているようである。「上手に育てる」がまことに言葉通りに行われれば問題はないが、現実としては、「自分の子どもを誰よりも賢く育てたい」という親たちの熱望が、英語学習、中国語学習や過度の商業主義による様々な早期教育につながっていると環園大学校児童学科の鄭美羅教授は指摘する。(⑧-p.3.)

申宜真教授の著書は、韓国・中国で30万部のベストセラーになったという。その背景には、小児精神科の専門医としての立場からではなく、二人の子どもを育てている親として執筆されたからだと言われている。子どもを育てる際に、物質的な保障や子どもへの無条件の愛に固執する韓国社会にある独特の雰囲気やプレッシャーを想定しつつ、「子どもをどれだけ愛しているかではなく、どのように愛しているか」が重要であると説いている。

近年韓国社会において多くの親は、「子どもの幸福を即親の幸福だと考え、子どもたちが成長した後の社会的地位や位相が高ければ、親の人生もそれと同じだけ成功なのだと考えている。そして、社会的成功を得るためには、学校で勉強をがんばって賢い人間となり、社会で認められる職業に就くということだと考えてもいる。その結果、いま親たちは子どもたちに小学校入学以前から、ピアノや美術、身体運動はもちろん、ハングル、英語、数学等のような認知中心の先行学習までさせるのである。その上、特技教育の開始時期も次第に早くなり、2,3歳、またはそれ以前からというようになってきている」という。(⑧-p.4.)

韓国人の特性の一つである「せっかち」、「性急」は、日常生活の活動場面だけでなく、子どもの養育においても現われているのである。申宜真教授は著書の中でも、「韓国人は『早く、早く』とせっかちなところがあり、本当に必要かどうか考えもせず無条件に受け入れてしまう傾向があります。子育ても同じ。私を訪ねてくる親子を見ても、子どもを早くひとり立ちさせようとするケースが増えています。何でも『早く、早く』です。『子どもに本当に必要なものを見つけよう』なんてのんびりしてられない、『遅れたらダメ』という強迫観念がとて強くなっているのではないかととても気になります」と述べている。(⑨-p.44.)

このような状況の中、申教授の「ゆっくり育てる」という提案は、子どもを放任するということではなく、過度に発達の先取りをするという雰囲気に関わることなく、子どもの成長段階、発達段階に合わせた育て方の提唱であるといえる。

子どもの発達段階に即した思考力が育っているがどうか最重要であるとして、**one step behind** と **one step ahead** の子育て戦略を提唱している。

**one step behind** とは、「一呼吸おいてから対応する方法」で、「子どものなすがままを見守り、何かに好奇心を示したときに親がそっと後押しすればよい」という考えである。

**one step ahead** とは、子どもの**気持ち**を先回りして理解、共感することで、「たとえば、ご飯が食べたいのにうまく言えない、そういうとき親が『ごはん』と声に出してやる」ことだとしている。(⑨-p.54.)

**one step behind** という考え方は、日本の近代以前の時期の子育ての特徴であり、柳田國男のいう「児やらい(コヤライ)」の思想と同じである。「児やらい」の「ヤラフ」とは、節分の鬼ヤライなどのように、基本的には後ろから追い立て突き放すことであるが、ちょうど今日の教育の、前に立って引っ張っていかうとするのはまるで正反対の教育方法で、ヤラフという言葉を使うと何か過酷なことのよう思えるが、どこかで区切りを付けないと、いつまでも独り立ちできないのみならず、親より優れた人間になることができないうい思から生まれた子育ての方法である。かといって完全に突き放すのではなく、一歩後ろから見守りながら、子どもの自然な性向に従って発達を促す、子ども主導とおとな援助の姿勢を示す教育方法である。(拙編著『教師論・保育者論—子育て文化の継承と再発見』三晃書房、平成 12 年、大藤ゆき『子育ての民俗—柳田國男の伝えたもの』岩田書院、1999 年、参照)

また、アメリカの児童心理学者デイビット・エルカインドらが提唱している、ピアジェ派の提唱する「発達段階に即した教育」の考え方も共通している。エルカインドは、ピアジェの発達段階(感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期)の理論とエリック・エリクソンの「人間の八つの発達段階」の理論を組み合わせながら、子どもたちは「ゆっくりとおとなになる」ということを繰り返し強調している。(デイビット・エルカインド『急がされる子どもたち』紀伊國屋書店、2002 年、『ミスエデュケーション』大日本図書、1991 年、David Elkind, *The power of play*, Da Capo Press, 2007 ; 拙編訳『早期教育への警鐘』創森出版、1997 年、参照)

**one step ahead** の考え方も、たとえばアメリカの臨床心理学者ハイム・ギノットらが提唱している子どもに対する接し方と同じだといえる。例えば、ギノットは、「子どもたちは、自分の中で起こっていること、自分がその瞬間に感じていることを、わたしたちに理解してもらいたがっている。それも、経験したことを全部説明しないまま理解してもらいたいのだ」。それゆえ「子どもが感じている痛みやとまどいや怒りの感情を、私たちが理解していることを示さなければならないのだ」(⑩-p.28.)という。

さて、申宜真教授の主張にもどると、彼女は「かしこい親が実践していること」として以下の 6 点を勧めている。

- (1)子どもが喜ぶ遊びを選ぶ (早期教育メソッドがどんな良いことをいったとしても、「副作用」があることを忘れないようにしよう)。
- (2)他の子と比べて怒ったりしない (子どもの発達は一人ひとり違う)。
- (3)発達を見守り、過剰な心配をしない (「いつも笑顔があれば」という考え方をしよう)。

(4)あせらず、急がず、絶えず励ます (徳川家康公家訓「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず」)。

(5)子どもの盾になってやる (「子どもは宝」)。

(6) 無条件の愛情と信頼を示す (愛情を十分注がれて育つと自立も早い)。

また、「ゆっくり子育て7つの提案」として、次のように提案する。

提案① 親としての自分を振り返ってみよう

- ・ 絶対的な愛情がありますか (ボンディング・・・親子には心が結びついている感覚が必要)。
- ・ 感受性は働いていますか (子どもが送ってくるサインに気づき、タイミング良く対応する)。
- ・ 反応力を鍛えていますか (子どもと視線を交わすことも含め、子どもの期待に応える)。
- ・ 子育ての態度は一貫していますか (一貫性を保つために、親はぐっと我慢も必要)。

提案② 感情のコントロールを学ぼう

- ・ 子どもは感情表現の練習中と知ろう (我慢や忍耐ばかりを強要すると情緒不安定になる)。
- ・ 子どもの情緒は親の感情に左右される (小さな子どもは人の表情の裏まで読み取れない)。
- ・ 親が落ち込んでいる時は、しからない (感情のコントロールには、努力とトレーニングが必要)。
- ・ 肯定的なまなざしが自信を育てる (子どもと接する時は、まず感情の調節から)。

提案③ 「なぜ？」をたくさん言わせよう

- ・ しつけの代わりに「協議」と「交渉」を (子どもが納得できるレベルまで降りて交渉する)。
- ・ 社会性や思考力も「なぜ？」から育つ (子どもの「なぜ」に、ひとつひとつ説明を)。
- ・ 妥協してはいけない交渉もある (人を殴ってはならない、盗んではならない、など)。
- ・ 親の意見を素直に聞く力を育むには (まずは子どもの言い分を聞いてから、協議や交渉を)。

提案④ 言いたいことは「ユーモア」にくるんで伝えよう

- ・ まともにぶつからない (子どもは急に変わらなくても、きちんとメッセージを伝えられたら十分)。
- ・ 笑顔は親も子どもも救う (ただし、冗談でも子どもはけなさない)。

提案⑤ 分かってくれない時は、親が我慢しよう

- ・ 「できる」には、時期を待つ (情緒・言語・認知の発達には目には見えない)。
- ・ 納得すれば、子どもも我慢する (子どもなりの理由が必要)。

提案⑥ 教えたいことは、親がやって見せよう

- ・ 子の姿を見て、親は反省を (親がしていることを子どもは真似る)。
- ・ 生き方の手本は親 (子どもは親の背中を見て育つ)。

提案⑦ 子どもはラグビーボールのようなものと悟ろう

- ・ 子どもには、子どもなりの理由がある (子どもは自らまわりの世界にぶつかっていき、あれこれ経験する。おとなから見れば、どの方向へ飛び跳ねるか分からないラグビーボールのようなもの)。
- ・ ちょうどよいスタンスを見付けて (子どもへの過剰な執着心を緩和させる別の世界を持つ)。

以上のような提案は、日本にとっても今後ますます重要になってくるだろう。他山の石としたい。

## 6. おわりに

近くて遠い国といわれる韓国の文化や幼児教育を調査・研究した後の感想は、当然のことかもしれないが、日本とよく似ている、ということだった。ともに儒教文化圏にありながら急速に西洋化し、伝統と最新技術とのギャップにとまどいを持っている。韓国でいわれていることは、何も新しいことというわけではなく、アメリカなどですでに指摘されていることが多

い。しかし、アメリカでいわれていることをどのように儒教文化圏、アジア文化圏に取り入れ消化するかという問題に関しては、日本は学ぶべきことも多いと感じた。日本の場合は、伝統的なものはすべて古いもの、捨てるべきものという傾向が強いのにに対して、韓国の場合は、韓国の伝統を生かしながら欧米の良いものをうまく取り入れている。いや、コウ・チョン・ヘソンに至っては、「東洋の美しい風習をアメリカ国内に知らせようという意図」も必要だというだろう。(⑩-p.85.)

また、礼儀作法に関しても韓国と日本はやや似た面があるが、申宜真教授は、子育てと関連して次のように述べている。

「韓国のお母さんが強迫観念を抱くほどしつけに厳しくなるのは、国民性といえるかもしれませんが、『大切な子どもだからこそ、厳しく育てなければならぬ』、韓国の人にはそういう考えが美德として根強く残っているのです。また、韓国の社会では礼節が非常に重視されます。けれども実際は、『礼儀を教える』という名目で、子どもの自発的な発達を抑圧しているケースがたくさんあるのです。厳しいしつけは子どもにとって過酷なだけ。一方親たちは『当然の教育をした』くらいにしか思っていない。

日本にも似たような風潮があります。『他人に迷惑をかけないように』という考え方は、日本人の奥ゆかしい国民性を象徴していますが、子育てでは禁句です。乳幼児期に必要な以上の制裁や圧迫を与えていると、自我を自滅させかねないからです。(⑨-pp.148,149.)

「待ちの教育」ではなく、性急な教育を続けていたら、日本のようになるぞ、という警告である。われわれ日本に住むものも心したい。

富山国際大学、国際教養学部、国際コミュニケーション学科における「国際文化研究」の一環として行われた調査研究であったが、多くのことを学べた。引き続きこの研究をベースにして、調査研究を発展させていきたいと考えている。

この調査・研究に当たって、(財)富山県高等教育振興財団からの助成があったことを記して感謝したい。

## 参考文献

### 著書

- ① 金容権編著『韓国を知る事典』(東海大学出版会、2002年)
- ② 真田幸光編著『早わかり韓国:文化が見える・社会が読める』(日本実業出版社、2002年)
- ③ 有田伸著『韓国の教育と社会階層:「学歴社会」への実証的アプローチ』(東京大学出版会、2006年)
- ④ 池田充裕、山田千明著『アジアの就学前教育』(明石書店、2006年)
- ⑤ 日本保育学会編『諸外国における保育の現状と課題』(世界文化社、1997年)
- ⑥ 勅使千鶴編『韓国の保育・幼児教育と子育ての社会的支援』(新読書社、2007年)
- ⑦ 一見(錠屋)真理子『東アジア地域における「早期教育」の現状と課題に関する国際比較研究』(科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「東アジア地域における「早期教育」の現状と課題に関する国際比較研究」研究報告書、2005年)
- ⑧ 一見(錠屋)真理子『韓国における早期教育の現状と課題:資料と解説』(科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「東アジア地域における「早期教育」の現状と課題に関する国際比較研究」:中間資料集)、2003年
- ⑨ 申宜真著、辛椿仙訳『かしこい親の子育て術』(小学館、2004年)
- ⑩ コウ・チョン・ヘソン著、蓮池薫訳『人生でもっとも大切な2つの教え:ひとの役に立つ人間になりなさい。徳は才に勝る』(海竜社、2007年)
- ⑪ 杉原清一郎著『日本の道徳教育は韓国に学べ』(文化書房博文社、2007年)
- ⑫ キムパブ・ノリヨ著『韓国で暮らしてみれば』(国際語学社、2007年)
- ⑬ ヘレナ・ノーバーク・ホッジ著『ラダック 懐かしい未来』(山と溪谷社、2003年)



- ⑭ レオ・ブスカリア著、林真理子・相原真理子訳『LOVING EACH OTHER』(講談社、1986年)
- ⑮ 山田桂子著『「待ち」の子育て』(農文協、1986年)
- ⑯ ハイム・ギノット著、管康彦訳『子どもの話にどんな返事をしていますか』草思社、2005年。 Haim G. Ginott, *Between Parent and Child*, THREE RIVERS PRESS, 1965
- ⑰ *Koreana*(日本語版「韓国の芸術および文化」韓国国際交流財団、2006-2007年)
- ⑱ Joonghae Suh, Derek H.C. Chen, *KOREA as a Knowledge Economy*, The World Bank, 2007.
- ⑲ OECD, *Korea and the Knowledge-based Economy*, The World Bank, 2000.
- ⑳ 中村高康・藤田武志・有田伸編著『学歴・選抜・学校の比較社会学—教育からみる日本と韓国』(東洋館出版社、2002年)

#### 論文

- ① 相馬直子「子どもと<福祉/教育>国家:韓国における<保育/幼児教育>領域の歴史的変容」(2003年度厚生労働省科学研究費政策科学推進研究「韓国・台湾・シンガポール等における少子化と少子化対策に関する比較研究」(研究代表小島宏)総括研究報告書、2004年)
- ② 張京姫「幼稚園と保育所の一元化施設に関する研究—保育制度の二元化の問題点に照らした施設の実態調査から」(日本福祉大学社会福祉学研究科 Working Paper Series, WP-2006-09-J)
- ③ 金成垣「韓国福祉国家性格論争—その限界と新たな出発点」(日本福祉大学21世紀 COE プログラム研究助成研究)

他に以下のホームページも参照した。

- ・三星福祉財団ホームページ(<http://www.samsungfoundation.org/html>)
- ・日韓文化交流カレンダーホームページ(<http://www.jkcf.or.jp/calendar>)
- ・KOREA.net(<http://www.korea.net>)